

ではないか。「セリエ君、手遅れにならないうちによく考えてみたまえ。君はそんなつまらぬ薬学研究で一生を台無しにするつもりか」

幸いセリエにも支持者が一人いた。インシュリンの発見者フレデリック・バンティング卿である。卿は度々彼のもとを訪れ、援助としてまず五百ドルを送ってくれた。一九四四年にセリエは若干の成果を全米医学会報に発表した。一九五二年には「適応症候群」が出版された。今日では彼の生物学的ストレスの概念は全世界の医学関係の教科書に採用されている。

要約していうとこうである。人が何らかのストレスのもとにある時、その身体はある決まったやり方で反応する。ストレスには有害なもの（これをディストレスとよぶ）と、逆に高揚させるもの（ユーストレス）とがあり、例えば競馬で当たりをとったという知らせなどは後者の場合のストレスと考えられる。

ストレスは、家族間の、または仕事上の、あるいは社会的なタブーや伝統による抑制などからくる緊張が原因である。いわば、われわれの適応の仕組みをはたらかせる一切の生活状況がストレスを作り出すといってもいい。心理学的にみると、欲求不満、失敗、屈辱などといった経験が最もストレスを生みやすい。一方、勝利や成功などは、多くのエネルギーや刺激をもたらし、力と喜びを与えてくれる。この二つは明らかに違うものだが、生物学上の観点からは共に同一の

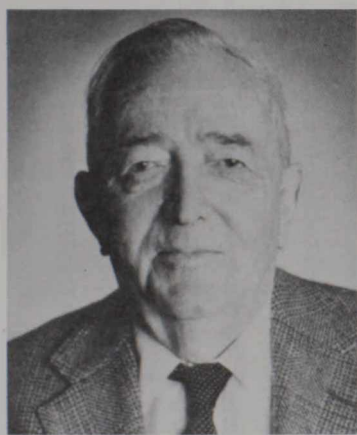
効果をもたらす。つまりストレスをおこすのである。ユーストレス（喜ばしい方のストレス）は苦悩にくらべると緊張と持続の度合いが少ないので、より有害でないといえるだろう。

静かなるカナダ人

ウィリアム・ステファンソン

ウィリアム・ステファンソンは、写真電送を発明して、三〇才になる前にすでに百万長者になっていた。しかし、彼を有名にしたのは、写真電送の発明だけではない。

ステファンソンは、第二次大戦中、「イントレピッド」（勇敢な、という意）という名前で南北アメリカにおける連合軍の逆スハイ活動を指揮し、連合軍の戦勝に大きく貢献した。一九四五年、英国国王ジョージ六世はステファンソンに爵位を、また米政府は外国人としては初の大統領功労章を授け、彼の功績をたたえた。



Aquarius Studio

昨年四月には、英国海軍が新しい艦船に「イントレピッド」と命名。同船は本物のイントレピッド、ステファンソンが住むバミューダに寄港して、初顔合わせを行なった。八十五才。

バレエ界の星

フランク・オーガスチン

一九七二年、猛烈な完璧主義者ルドルフ・ヌレエフは、軽々と宙を飛ぶ一人の若い男性舞踏手に目をとめ、この男を自分の演じる王子フロリモンの代役に抜選した。この若者がカナダ・ナショナル・バレエ団のフランク・オーガスチンだった。この時以来、ヌレエフは彼の目標となった。

一九七三年秋のウィニペグで、ジゼル第二幕のさなかに突然オーガスチンの膝がピシッと異様な音をたてたが、彼はそのまま踊り続けた。後になって軟骨がくだけていることがわかった。除去手術はトロント病院で行なわれ、軟骨はオーガスチンのベッド傍の小さなガラス瓶の中におさまった。バレエ団の団長ジョアンヌ・ニスベット女史によると、それはちょうど「ぐしゃぐしゃにな



ったエビみたい」だった。膝はやがて回復したが、オーガスチンは一年間踊れなかったし、以前のような完璧な能力を取り戻せたのは一九七六年になってからである。以来彼は自らを克服し、国内はもとより、メトロポリタンで、ロンドンで、批評家の絶讃をあびながら踊り続けている。

彼は今もってヌレエフと同じ厳しさを自分自身を駆り立てる。オーガスチンは言う――「今私は自分自身のためだけに踊っているのです。批評家や着飾った観客や、もつといえはもし仮に女王陛下が臨席されたとしても、そのために踊ろうとは思いません。私自身のためだからこそ踊れるのだし、舞台上上るのは自分がそこにいたいと思うからです。そういうやり方ではじめていい演技ができるのです」